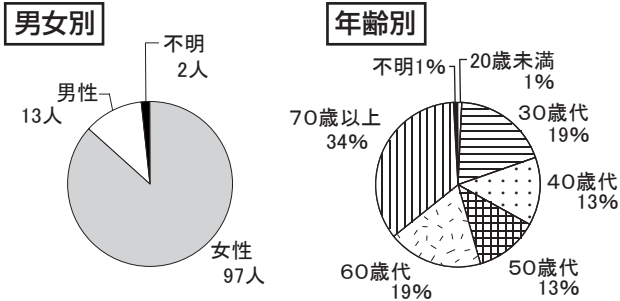


女性の生涯にわたる健康を考えてみませんか！

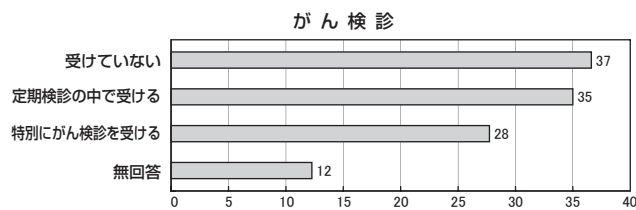
ウィザスアンケート

実施期間：平成22年9月16日～10月1日

芦屋市男女共同参画センターウィザスあしやへ来館された112人の方にアンケートの協力をいただきました。

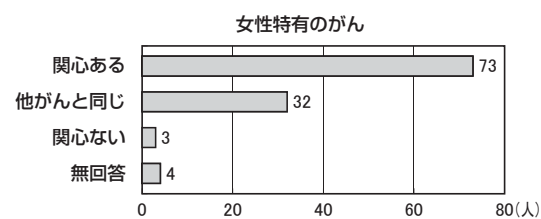


◆がん検診をうけていますか？



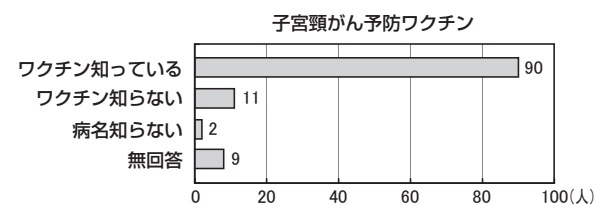
「とくに検診を受けたことがない」37人。3人に1人ががん検診を受けていないことがわかりました。

◆女性特有のがんに関心がありますか？

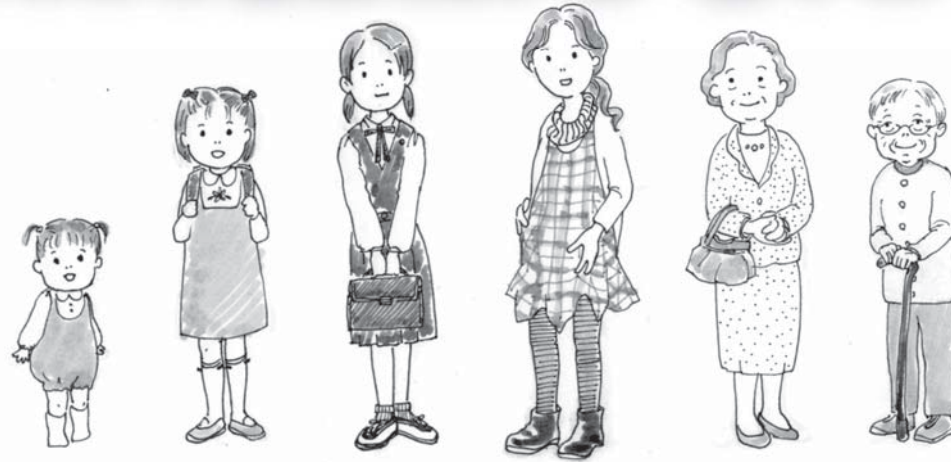


女性特有のがんに「関心がある」が7割を超えています。とくに女性の30代、40代の9割が「関心がある」と答えています。

◆子宮頸がんの予防ワクチンについてたずねました。



9割近くが「子宮頸がん予防ワクチンが承認されたことを知っている」と答えています。



国民生活基礎調査（平成19年）によるがん受診率は3割以下に低迷しており、国では今、がん検診受診率50%以上を目標に掲げてキャンペーンを行っています。子宮がんや乳がんなど女性特有のがん検診受診率はさらに低く2割程度。国際比較をみると受診率7割を超える欧米とは比べものになりません。子宮がんや乳がんなど出産にかかわる女性の生涯にわたる健康について考えていきませんか。

寄稿 予防ワクチン接種、子宮頸がん撲滅に期待



宮本由紀子さん
由っ子クリニック院長
(芦屋市業平町)

思春期、更年期、老年期にわたる婦人科専門。
芦屋市男女共同参画推進審議会委員。

子宮頸がんは、女性がかかる癌のなかでも乳癌に次いで多く発症しており、日本では年間約8,000人から15,000人が罹患し、2,500人から3,500人が亡くなっています。子宮の入り口にできる癌で、扁平上皮癌と子宮内膜よりの腺癌がありますが、圧倒的に多い扁平上皮癌は、性交渉でうつる発癌性ヒトパピローマウイルス（HPV）の感染が原因です。性交渉をもたない女性には罹らない癌であることはもうすでに欧米では18世紀から考えられていました。処女の尼僧にはこの病気は無かったからです。定期的に検診を受けていればごく早期に発見し治療することができます。

しかし、進行すると妊娠や出産を望めなくなるような手術や、放射線治療や化学療法を受けなくてはならなくなったり、さまざまなダメージを蒙ることになります。頸癌の検診は簡単に痛みも少なく、精度も非常に良いという他の癌検診にはない特徴がありますが、現実には、日本における受診率は欧米諸国の60%から80%に対して、20%弱と極めて低く、肝心の20歳前半では5.6%、後半でも16.3%に留まっています。

HPVは、性交渉でほとんどの女性が一生に一度は感染すると言われていたほど一般的なウイルスです。このたび日本でも発売認可された子宮頸癌予防ワクチンは、頸癌から最も多く見つかる16型と18型のHPV感染を防ぎます。初感染する前に接種する方が有効であることから、100カ国以上で9歳から16歳の女兒に優先的に無料で接種が行われています。

また、HPVは自然感染による免疫反応は弱く、何度でも再感染することや、日本での頸癌死亡率が30歳代と、免疫力が落ちると思われる70歳代の2つにピークが見られていることから、それ以上の女性に対してもワクチン接種が勧められています。

ただし、このワクチンは他のタイプのHPV感染を防ぐことや、癌化している病変の治療はできませんので定期的に子宮頸癌検診は絶対に必要です。ワクチン接種と検診の普及で撲滅を期待できるのは、現在も女性死亡率の高い子宮頸癌だけです。

ウィザスアンケートから、多くのかたが子宮頸がん予防ワクチンの最新情報を知っている反面、3人に1人が「自分自身のがん検診を受けていない」ことがわかりました。がん検診を受けない理由は、「とりあえず、今は健康だと感じている」が7割近く、「必要性は感じるが後回しにしている」が4割を超えていました。2割前後のかたが「受診したことはないが、受診したいと思っている」「育児・介護などで時間が無い」を理由にあげ、「面倒だから」「結果を知るのが不安」「近くに病院がない」「検査料がかかる」はほんのわずかで、がん検診を不要と考えているわけではないことやがん検診の関心の高さがうかがえました。

子宮頸がんは、ワクチン接種により予防できるようになりました。このことは、多くの人が関心を持ち、認知されるようになってきました。

しかし、検診を受けワクチン接種を受ける人はまだまだ少ないのが現状です。子宮頸がんを引き起こすウイルスは性交渉により感染します。女性にとって性交渉とは、妊娠・出産そしてがんの発症とまさしく健康と生命の存続に直結したものです。女性が自分自身の健康・将来のことを考えて性交渉の持ち方・妊娠・出産するしないを自ら決めていくことが大切ではないでしょうか。

「女医さんと一緒に考える一女性のための健康講座」から

平成22年度芦屋市男女共同参画センター講座「女医さんと一緒に考える一女性のための健康講座」（7月2日開催）に宮本由紀子先生をお迎えし、女性のからだを守る基礎知識から子宮頸がん予防ワクチンの最新情報まで女性の健康について学びました。患者の立場ではなく、医療専門家の意見をきける質疑応答の時間が好評でした。

ウィザス編集委員の感想より

- ・娘がいるが、将来のためにも「女性」だということをしっかり認識しておかなくてはと思った。
- ・数値データで説明してくださり、よく理解できた。
- ・由っ子先生のストレートな話し方がよかった。気軽に質問もできた。
- ・日ごろ見落としがちな自分自身のからだを丁寧にケアしなければと思った。
- ・任意接種5万円ほどの自己負担は、やはり高い。
- ・子宮頸がんワクチンの公費負担の早期実現を願う。

リプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康/権利）

平成6年（1994年）のカイロの国連会議（国際人口・開発会議）で国際的承認を得た考え方で、ここでいう健康とは単に病気でないことをいうのではなく、身体的、精神的、社会的に良好な状態をいいます。安全な性生活を営み、子どもをいつ何人産むか、または産まないかなどについて当事者である女性が選択し、自ら決定する権利のこと。